



JR 古川駅駅長 **佐藤 暢** さん

地域の皆さんと 一緒に DC を盛り上げ 復興の後押しをしたい

大崎市の玄関口 JR 古川駅で、昨年 11 月 1 日から駅長を務める佐藤暢さん。東日本大震災を振り返り、そして、平成 25 年 4 月から 6 月にかけて行われる国内最大規模の観光キャンペーン「仙台・宮城デスティネーションキャンペーン (DC)」を控え、現在の「想い」を語っていただきました。

写真右 / 昨年 11 月、JR 陸羽東線で雄姿を見せた「SL 湯けむり復興号」。



前日の訓練が功を奏する

震災時、私は山形支店にいましたが、以前の勤務地が石巻駅だったので、大変心配していました。昨年十一月に古川駅に赴任し、あらためて震災当時の状況を聞きましたが、古川駅で震災前日に行われた防火訓練のおかげで、管内で十三本の列車が緊急停止したにもかかわらず、多くの関係者の冷静な判断により一人も負傷者を出さなかったこと、お客さまを避難誘導できたことに感謝を受けました。

また、三本木地域で停車した新幹線の乗客八百三十人を、大崎市三本木地域の子育て支援総合施設「ひまわり園」に受け入れていただき、感謝しています。

後日、避難者の中にいた妊婦さんからお礼の手紙をいただきました。このような温かい気持ちに配慮するため、市民の皆さんがより安全に JR を利用できるよう、防災訓練にも力を入れていきます。

地域の力を結集し DC を復興の契機に

平成二十五年四月から六月にか

けて、JR と自治体などが協力して行う国内最大規模の観光キャンペーン「仙台・宮城デスティネーションキャンペーン (以下 DC)」が開催されます。今年は、DC の前年ということで、イベントも企画されています。復興への大きな効果が期待される一方、依然として各地で震災の被害が色濃く残り、平成二十年に宮城県で開催された DC のような雰囲気をつくるのは難しいのでは、というのが正直な気持ちです。しかし、このような状況の中でも、地域の中には皆さんが自慢できる「宝」が必ずあるはず。DC の主役である市民の皆さんの手で、地域に眠っていた観光資源や前回の DC とは違う大崎の新たな魅力を全国各地にアピールして「大崎市は、宮城県はこんなに元気だよ」とたくましい姿を見せて欲しいと願っています。JR では、首都圏への宣伝など、さまざまなネットワークを使って宮城県の復興を後押しします。単発では終わらない持続的な観光戦略を一緒になって考え、復興への一助になればと思っています。

今年にかける想い

昨年、各地に大きな被害をもたらした東日本大震災。そのつめ跡は、今なお市内に色濃く影を落とし、私たちの記憶に刻み込まれています。復興への道りは長く険しいものですが、新しい年を迎え、震災に負けず奮起する人たちの「想い」を届けます。



今年にかける想い①
JR 古川駅駅長
佐藤 暢さん



今年にかける想い②
アイネックス㈱
取締役管理部長
東海林 仙之さん



今年にかける想い③
凜菜・上の家
「おかえりなさい」代表
奥野 幸子さん

特集 今年にかける想い